
ギクシャク

潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギクシヤク

【Nコード】

N8328V

【作者名】

潤

【あらすじ】

岡山から大阪へと引っ越してきた加茂 泰平。

その横の部屋の住人の平野 雅。

クラスメートの水野 理穂。

この3人で繰り広げられるよくわからない話です。
一応ジャンル学園恋愛です。

あ、別サイトにもUPします。

引越し

ガタンゴトン。
ガタンゴトン。

俺は加茂泰平。
カモタイヘイ

今まさに引越し先にむかっているところだ。
岡山から大阪へと。

「ふわぁ〜ねみい。少し寝るか」
新幹線でそう呟いた。しばらくして駅に止まった。
のはよかったが…。

新大阪越えて京都来ちまったよ。
新大阪に止まる新幹線に乗り換えてついた。
今度こそ新大阪駅に。
そしてそこから地下鉄に乗り換えて
さらに近鉄に乗り換えてさらに
バスで20分くらいついた。
俺の新居となるアパート。
しかし前来たときより古くなってないか？

とりあえず部屋に行く前に管理人さんに挨拶だ。

「あのーすいません。」

「はいー」

その声はとても若く
アパートの経営者だとは思えなかった。
そのためポカンとしていた俺。

「あ、管理人さん探しているの？」

「はい…」

「お母さんー、お客さんやよー」

「はいはい」

今度こそ管理人さんの登場。

「あの新しく引っ越してきた加茂 泰平です」

「ああ〜君がそうなの。はい、カギ」

「ありがとうございます」

部屋でのんびりしているとノックがされた。

「はい」

「こんにちは。

私、ヒラノミヤビ平野雅です」

さつき管理人室から出てきた女の子だ。

「こんにちは。

平野さん」

「むー。」

平野さんじゃなくて雅がいい」

「わかったよ、雅。

何か用？」

「とりあえず喉乾いた。

お茶だして」

「雅、無茶じゃ。」

俺は今日引っ越してきたばかりで

まだお茶わかしてないし」

「それじゃジュース」

「あーもうなんなのさ」

「何って私はお隣さんだけど…」

「へえー。お隣さんなんだ。」

えー！！お隣さん？

横の部屋の住人？」

「そうよ。」

とりあえず立ち話もなんだから

部屋あがらせてもらうね」

「つておい。勝手に入んなし」

「もうあがったわよ」

「へえへえ」

部屋にかかっている制服をみて

雅はびつくりしたようだ。

「え？加茂君も同じ高校？」

「知らん」

「だってこの制服

私の高校の男子の制服だもん」

「そーなんじゃ。」

つて待つて。

雅の高校つてことはもう高校生なんか？」

「ううん。」

今年の春から高校生だよ」

「つてことは同じ年じゃ」

「加茂君も今年の春から高校生？」

「ああ」

「つて人の部屋でくつろぐな。

隣なら自分の部屋へ帰れよ」

「はい。加茂君のイジワル」

そう言うと雅は壁にあった穴から部屋に戻った。

「はあ、なんつーか前途多難じゃな」

入学式

高校の入学式。

まあ校長の話やら

PTA会長の話やらがあった。

クラスを見渡せば雅の姿があった。

「はあ前途多難じゃな」

「お前近場の人間じゃねえな」
いきなりクラスメートに言われた。

「ま、まあ岡山から来とる」

「おーおースゲー。県を越えてきたよ」

「いやあ、それほどでも」

確かによく考えればただ単に
一人暮らしたいがために
岡山から大阪へと来たのも
スゴいことなのかもしれないな。

「加茂君ー」

「んだよ、雅」

「岡山から来たの？」

「まあな」

「この町案内しようか？」

「いらねえー」

「それじゃー」

「別に何もせんでええ」

「ぶー。人の親切を無駄にしちゃアカンよ」

「そーだよな。」

でもホンマにいらん」

「どっちやねん」

「今はいらんよ。また今度」

とまー俺が雅とくだらない話をしていたせいで

なんか周りの男子から白い目で

見られた気がするの俺だけだろうか？

「はい。それじゃ最初のホームルームはじめると」

まあ明日から授業だそうだ。

「加茂君一緒に帰ろう」

雅かと思った。

誰か知らない女子だった。

「いいけど…。その前に誰？」

「ああ、私は理穂。水野 理穂」

「水野さんね」

「でもなんで俺と？」

「まだ友達いないでしょ？」

「まあいるちゃあいるが…」

「いるって誰？」

「あそこにいる平野さん」

「ふうん」

「んじゃま、帰ろう、水野さん」

「そだね」

まあはじめての学校だから出身校とか聞かれたが
岡山の中学じゃ水野さんもわからなかった。

でもけっけつ話は弾んだ。

雅と水野さん

「ばあ」

突然雅が現れた。

「どっから出てきとん」

「壁の穴から」

「そりゃ見たらわかるけど…」

「いつあけたんじゃろ？」

「じゃろだつてさ」。

話し面白い」

「これは岡山の方言じゃ。

話を戻すがいつこの穴あけたん…？」

「いつつて元からあいてたよ」

「なんちゆう部屋じゃ」

「昔住んでた人が壊したらしいよ」

「直せよ」

「んゝお母さんが言うには

修理費ださずにどっか行っちゃったらしいよ」

「で、何の用？」

「遊びにきただけ」

ということとで仕方なく

雅につきあつて話したり遊んだりした。

「よ」

「な、何？」

水野さんがぼんやりと突っ立っていた。

「何見てんの？」

「野球部の朝練だよ」

「野球好きなの？」

「ん〜というか今年は甲子園出れるかなって思ってみてる」

「え、ここ野球強いん？」

「いつも1回戦負けのあんまり強くない学校かな」

「へえー、俺も少し見ていくか」

そう言っつて野球部の朝練を少し眺めていた。

うん。

普通の野球部の朝練だ。

「甲子園いけるといいな」

「うん」

そうしてクラスまで野球の話が聞かされた。
まあプロじゃなくて高校野球の話だが…。

日曜日の誘い

「加茂君ー」

また雅が壁の穴から出てきた。

そこはうちの玄関じゃねえ

「日曜日、遊園地行こうよ」

「なんでまた遊園地？」

「ん〜お母さんが新聞屋さんから

カップル専用無料券もらったから」

「って俺らはカップルじゃねえ」

「でも捨てるのはもったいないよ」

「それもそーだよな」

「じゃ行く？行くよね？」

「はあ、わあつたよ。行くよ」

「やったー、加茂君と遊園地行けるー」

—————

「よう、今日も野球部の朝練眺めてるのか？」

水野さんが野球部が朝練をしているグラウンド眺めていた。

「今度の日曜日さ、地方大会の試合なんだよね」

「ほうー。そりゃ勝ってほしいな」

「でしょ、よかつたらだけど…一緒に応援行かない？」

「今度の日曜日かあ…ゴメン。雅と約束があるんだ」

「雅？加茂君の彼女？」

「違うよ。あークラスに平野さんいるだろ？あいつの下の名前だ」

「ふうーん」

「んじゃま、俺はクラスに行くわ」

「ねえ、もし2回戦行ったら一緒に応援行かない？」

「そんなときゃあいてたら行くよ」

「ん〜そっかあー」

なんだ水野さん変な感じだったな。

デート

日曜日。

「加茂君。行こう」

珍しく玄関から雅が現れた。

ノックくらいしろよ。まあ鍵閉め忘れた俺も悪いけどさ。

「おう」

電車に揺られて数十分。

遊園地についた。

カップル専用無料券を受付にみした。

「では、ホントのカップルかどうか見分けるため……
なんか嫌な予感が俺の中でしてきた。

「キスしてください」

「はあ？」

「カップルでしたらできますでしょう？」

雅と俺の身長差は5センチ。

かがまないとキスできない。

というか彼女でもないのにできるかっての。

「加茂君からはやっぱ無理かあ」

雅が言った。

雅が俺の肩をおろして無理矢理俺にキスしやがった。

「何すんだ」

「こっしなきや入れないもん」

「どうぞ、ごゆっくり楽しんでください」

でもしかし雅の唇柔らかかったなあ…。

まあその後アトラクション乗り回して。

閉園時間間近。

バーンバーン。

花火が打ち上がった。

さりげなく雅が俺の手を握ってきた。

そんなに嫌な感じはしなかった。

「キレイだな」

「うん」

「加茂君、好きだよ」

花火が雅をキレイに照らしている。

「…ゴメン。雅。」

友達としては好きだけど…

恋人にはなれないよ」

ヒュー。

スカッ。

花火の最後が不発だった。

帰りの電車はだいぶギクシャクした。

本当にこれでよかったんだろうか？

だから嫌なんだよ

「あれ？水野さん。今日は早いね」

「野球部の朝練がないのに早く来た

ついでに愛の告白でもしようかと思ってね」

「へえー。それはがんばって」

「うん」

誰も来ない。

「水野さん、もしかして俺邪魔かな？」

「ううん」

「そっかぁー、相手は野球部？」

「ううん。帰宅部」

「え、意外だね」

「加茂君はさ、平野さんのことどう思ってるの？」

「え、いきなり、何？」

「いや、どう思ってるのかなあって…」

「ん〜同い年のお隣さんかな」

それだけだよな？

俺が雅に思ってることって。

「つきあってる訳ではないんだ」

「おう」

「じゃ言うよ。私は、加茂君が好き。

一目惚れしたの。

つきあってくれないかな？」

…。

沈黙が走った。

まさか雅をふった次の日に水野さんから言われるとは。

「……」

「返事は？」

「……ゴメン。付き合えない」

なんか告白された後ってその人と

ギクシャクしてしまうから俺はそっこののが嫌いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8328v/>

ギクシャク

2011年10月7日17時21分発行